

那須烏山市SC (栃木県)

# 手作りマスクで感染予防に貢献

マスク不足に一役買おうと、手芸サークルがガーゼマスクの製作・販売に着手した。就業用に手作りしていたが、市民からの要望で受注を開始。口コミで人気を呼んでいる。



那須烏山市SCの手芸サークル「ぼけっと」では、令和2年2月中旬から、就業用にガーゼマスクを作り始めた。現在は、全国的なマスク不足で、市民からの受注が急増。ガーゼ素材の手拭いをほどいて、色・柄のバリエーション豊かなガーゼマスク（写真右）を製作している



公益社団法人那須烏山市シルバー人材センターは、宇都宮駅からJR烏山線で三十分ほどの大金駅近くに所在する。同じ烏山線の宝積寺駅・大金駅間の乗車券は、宝が積もり大金になる」という縁起ものとして人気を集め、全国から観光客が集まった時期もあったという。

大金駅周辺は、田園風景が広がっている。「ここは昔から少しも変わっていません」と網野榮事務局長。同センターでは、除草や草刈り、植木の手入れなどが事業の中心となっている。

## 手作りマスクで 市民を感染から守りたい！

新型コロナウイルスの感染拡大によるマスク不足の中、女性会員の手作りマスクが下野新聞（栃木県の地方新聞）に紹介された。

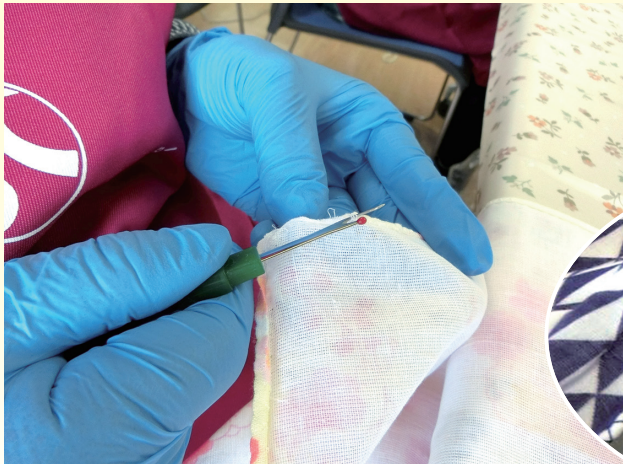
マスクを製作したのは、手芸サークル「ぼけっと」のメンバー。リーダーを務める佐藤妙子さんに



外周の糸切り作業をする栗田富江さん。「手拭い1枚につき、30分くらいかかります」



カラフルなガーゼ手拭い（写真上）を広げる、リーダーの佐藤妙子さん。この手拭いから4枚のマスクを作ることができる



ガーゼ手拭いの外周は縫ってある（写真右）。このため、リッパーを使って丁寧に糸を切っていく（写真上）



よると、サークル名の由来は「ポケットからいろいろなアイデアが出てくるイメージ」とのこと。

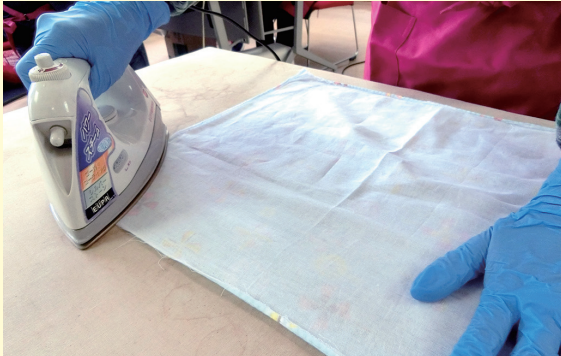
平成三十年四月に、女性会員七人でサークルを発足。毎月二回、手芸小物製作や洋服のリフォームなどを行ってきた。メンバーは通常、清掃、障子張り、ホームヘルプなどの作業に従事している。ガーゼマスクは、これらの作業時に自分たちで使用するため、令和二年二月中旬から作り始めた。

ところが、昨今のマスク不足を受けて市民からの要望があったため、現在はサークル活動を全てマスク作りに向けている。

### 丁寧な作業で心を込めて

当初はガーゼでマスクを作っていたが、材料が品薄となり、今はガーゼ素材の手拭いを材料に使っている。ガーゼ手拭い一枚からは、四枚のマスクを作ることができる。ガーゼ手拭いは外周が縫ってあるため、その糸を抜く作業から始

アイロンをかける栗静子さん（写真右）。糸を抜いた部分が波打っているのを、しっかりとアイロンをかけて平らにしていく（写真下）



リーダーの佐藤さんが、裁断するラインに沿ってガーゼ手拭いの横糸を抜いていく（写真左）。これはハサミを入れた際に、真っすぐカットするための工夫

める。リッパーで糸を切っていくが、かなりの労力を要する。「一枚につき、三十分くらいかかります」と栗田富江さん。

糸を抜いた後は手拭いの縁が波打っているのを、丁寧にアイロンがけをして平らにし、四つに裁断する。裁断するラインに沿って、ガーゼ手拭いの横糸を抜いていく。これはハサミを入れた際に、真っすぐにカットする工夫である。

四枚に裁断した生地は、折り畳んでミシンをかける。取材時（令和二年三月三十日）は、四人がミシンを使ってマスクを縫っていた。「折り重ねた部分がずれないように、注意して縫っています」と荒井喜代子さん。伊藤善孝さんは「だんだん慣れてきたので、どうしたら早くきれいにできるか、考えながら作業をしています」と話す。

ミシンをかけたマスク本体にゴムひもを通せば、ガーゼマスクの完成だ。

しかし、急激なマスク不足の影



取材時、ミシンがけを担当していたメンバー。写真左手前から時計回りに伊藤善子さん、荒井喜代子さん、高木積子さん、高橋トモエさん



ミシンがけが終わったマスク本体にゴムを通せば、ガーゼマスクの完成！お客さまが手にする商品を、亀田芳子さんが大切に袋詰めしていく

「折り重ねた部分がずれないように、注意して縫っています」と、慎重にマスクの形を整えていく荒井さん

響でゴムひもの入手が次第に困難になり、現在は手芸用のゴムやヘアゴムで代用している。

ガーゼ手拭いから製作したマスクは一枚ずつ袋に入れ、大人用二百五十円、子ども用二百円（税込）で販売。地元紙に掲載されたことから口コミで広がり、福祉関係やヘルパー、市民などからの受注も来ている。

一日に百枚ほど製作できるが、材料がそろわないため作業ができる日数も限られている。そのような中、新聞記事を読んで「マスク作りに、ぜひ役立ててほしい」と、材料を提供してくれる市民もいるという。

また、ガーゼマスクと並行して、キッチンペーパーで作る使い捨てマスクの製作も開始。市販の使い捨てマスクと同様の立体的なデザインで、五枚入り三百五十円（税込）み。こちらも人気である。

なお、これらのマスクは那須烏山市と栃木県内で要望のあった人



手芸サークル「ぼけっと」では、キッチンペーパーで作った使い捨てマスクの製作も開始。市販と同じように立体的なデザインに仕上がっている (写真左)。モデルを務めるのは、網野榮事務局長



作業室には、洋服のリフォーム (写真右) や人気商品の帽子 (写真上) を展示。現在、メンバーはマスクの製作に全力を注いでいる



に向けての受注販売となっている (販売はセンター事務所のみ)。

### メンバー以外の会員も 材料提供などで協力

「感染拡大防止に役立てば」という、ボランティア精神からスタートしたマスク製作。材料費に手間賃を少し加え、赤字にならない程度の価格で販売している。

リーダーの佐藤さんは「みんなが集まって、楽しく活動できるのでありがたいです。男性会員も材料提供などで協力してくれます」と話す。

取材後にはマスクの受注がさらに増え、連日マスクの製作に追われていると報告があった。

作業室には、手拭い帽子「さつとカブリーナ」やリフォームした洋服などを展示していたが、現在はマスク製作に全力を傾けている。一日も早い、新型コロナウイルスの終息が願われる。

(長野暁)